

# 文殊の知恵新聞

# 前例なき授業

2014年秋、岡山県の岡山城東高校、奈良県の奈良女子大学付属中等教育学校、京都府の京都学園高校による授業が行われた。この授業は、「転換期の文学(平家物語)の魅力」(兵藤裕己著)が共通する教材として提示され、その作品と、三校が独自に選択した教材を比較しながら読み進め、学習成果を共有するものである。授業内容は、主に動画投稿サイトYOUTUBEで共有され、いつでも閲覧できるものとなっていた。その結果、授業風景や流れが一目でわかり、授業の効率を高めるとともに、生徒達の思考に広がりを持たせた。

この授業に参加した岡山城東高校の生徒によると、城東高校は、『神様』(川上弘美著)、『神様2011』(同上)、『平家物語』の作品の中の「祇園精舎」と「藤戸」という四つの教材を用いて授業を進めたという。主な授業の流れとしては、まず作品を個人で読み込み、そして四人程度のグループでそれぞれが読み進める過程で生じた疑問を提示し、グループなりの意見にまとめ、最後にクラス全体で重要だと判断した疑問を一



京都学園高校にて、話し合う各校の生徒たち

つ一つ解き明かしていくというものだ。この授業の狙いは、作者の伝えたいことだけではなく、その教材が属している「文学」とは何か、そしてそれらに共通する性質とは何かを考え理解してゆくことにあった。また、生徒の一人は、「その過程で生じる疑問を解決し発表する、プレゼンテーション能力を身に付けることも、この授業の狙いである」と感じているという。なかでもその結果として、

岡山城東高校では、全ての作品をつなぐキーワードは「普遍性」であることを見つけ出した。つまり、それは価値観までもが転換する世の中を受け止めつつ、それでも変わらない日常を生きていく私たちが抱く「無常観」である。「時代を越えて共通するものがあると示し、それを発見させてくれるのが『文学』。」と、城東高校の担当教師畠岡睦実教諭は語った。

発行 京都学園高校  
文殊の知恵新聞社  
編集 堀江前野 矢追熊野  
発行所 龍太 裕貴 亮輔 翔

## 社説

### 二十一世紀型スキル

「無常」。この言葉の意味についてはおそらくほとんどの人々が学校の授業を通して習っていることだろうと思う。しかしその授業を教える「先生の意図」を考えながら授業に臨んだ生徒はそうそういないだろう。

そんな中、学校活動の一環として行われたものが「岡山城東高校」、「京都学園高校」、「奈良女子大学附属中等教育学校」3校による「二十一世紀型スキルを磨く―地域を超えて新聞づくり―」である。「二十一世紀型スキル」とは、ずばりこれからのグローバル社会を生き抜いていくためのスキルである。その中でも、「自分で考える」力が重要視される。例えば、与えられた作業があるとする。そこでその作業をなにも考えずにこなすことと、作業を与えた人の意図を考えた上で新たに自分なりの課題を見つけられることとは将来必要になる力をつけられる方とはどちらになるか、一目瞭然だろう。このプロジェクトでは、各学校の生徒たちが一つのテーマについて考える。

今回、「無常」というテーマを actual 生徒たちが行った流れを説明すると、まず生徒が各学校の先生方のやりかたで道標を教わる。もしくはグループワークなどで考える。そしてテーマについての予測や結論がでたところで、このプロジェクト最大の特徴である「動画サイトにアップされた他校の様子や報告を見る」ということをする。そして各々の授業の相違点や類似点を探るのである。ではなぜこのように授業の見比のようなものをするかの必要性だが、決して授業の優劣をきめようという

ことではない。授業を見比べることによって、生徒が先生によって作られた授業という「箱」を認識するためである。つまり、自分たちが当たり前のようになっている「いつもの先生」の授業の中にある先生の意図を、他の学校の先生の授業との違いなどを見ることで知ることを目的としているのだ。

最後になるが、これから先グローバル化が進行するにあたって、自分で考えて行動することが出来る「二十一世紀型スキル」を持つ若者が必要になる場面が増えてくるだろうと思う。今はまだ何もできないかも知れないが、今から「今」を少しずつでも変えていけば「未来」を変える大きな力になると信じている。



### 「無常」から世界へ

「世は定めなきこそいみじけれ。」徒然草第七段で兼好はこのように主張している。これには兼好の「この世は不常だからこそおもしろい」という訴えがこめられている。▼兼好はこの具体例として「人の死」を扱っている。「もしも人が永遠に生きていられるなら、どんなに物事の情趣のないことであろうか。」というのである。兼好は自分にも死が訪れるし、これからの人生が不常であることを覚悟している。死を身近に感じながらも死にたくないと思ひ、無常を悟らないから醜く見えるというものが兼好の考えである。▼これは、現世にも通用する考

え方ではないだろうか。現在の日本人は過去の日本や発展途上国の貧民と比べると、経済的に「恵まれた毎日」を送っている。その、豊かな生活が当たり前であると感じる。当たり前になつてしまった生活には感動することは少ない。▼兼好の「この世は不常だからこそおもしろい」という訴えは現代の我々にとつても示唆に富む。不常な世界は残酷な一面を持ちながらも、世界に感動をもたらすという側面を持っているのである。▼残念ながら、現代の人々は人生のしみじみとした哀感を分かっている。いつか自分の生活に終わりが訪れるということに自覚せず、目の前の感動や楽しい出来事に没頭してただひたすらに時間を浪費してしまふ。これは、現代の大きな問題である。▼「文学」は、不常な世界の両面性を語

る。『平家物語』『神様』…それは古典でも、現代小説でも同じである。「文学」を通して、人生のしみじみとした哀感をもちと世界に訴えていくことが必要である。▼そして、人生の「哀感」を自覚できるようになつたとき、我々現代人は、世界に愛着が湧くようになる。▼転換期の今、世界が抱える世界規模の多くの問題も、そこに解決の糸口が見いだせるのではないだろうか。

